

ポライトネス・ストラテジーの観点による コミュニケーションスタイルの分析

文学研究科英語コミュニケーション専攻博士後期課程満期退学

渋沢 優介

1. はじめに

2016年5月27日、アメリカ合衆国のバラク・オバマ大統領が広島市の平和記念公園を訪問した。現職の大統領としては初めての訪問であったため、当日はまさに歴史的な一日であった。被爆者をはじめ、広島の人々、多くの日本人が関心を寄せていたことのひとつは、「謝罪」についてであろう。たしかに謝罪についての世論は、様々でありオバマ大統領の広島訪問で謝罪があるのか否かについては、様々な意見が飛び交った。

結論からいうと、スピーチの中で直接的な謝罪はなかったが、被爆者の記憶を心に刻み共に平和な未来を選択し、広島と長崎は「核戦争の夜明け」ではなく、「道徳的な目覚めの始まり」として知られるであろうと語った。スピーチの内容に加え、被爆者の手を握り、抱き合う場面が非常に印象的であり、核兵器の廃絶を願い、平和な日常がいかに大切なものであるかを述べた大統領の姿勢に多くの人が共感した。

一般にスピーチというと、多くの聴衆に向けて一方的に話をするというイメージが先行するが、オバマ大統領のスピーチ全般にいえることは、話し手であるオバマ大統領と聴衆とが、ひとつのスピーチを共に作りあげていくということであろう。スピーチに関する研究は、レトリックをはじめ、スタイル（文体）、談話分析等の観点から多くなされている。本稿では、オバマ大統領のスピーチがなぜ多くの人の心に響き、共感を呼ぶのかについてポライトネス理論の観点から分析する。

2. ポライトネス理論と分析の手法

近年、ポライトネス⁽¹⁾に関する研究が、語用論の分野において進められ、多様な理論や枠組みが提唱されてきた。語用論というポライトネスとは、良好で調和のとれた人間関係の構築を目的とし、衝突を回避するための言語表現、言葉の使い分けである。

今日この分野で最も影響力を持ち、総括的にポライトネスの原則を提唱しているのは、Brown&Levinson（1987）（以下B&L）による理論である。

本稿では、語用論におけるポライトネス理論の視点から、特にB&Lの理論を基に、オバマ大統領の広島スピーチを分析し、オバマ大統領の用いた言語表現、言語観がいかに聴衆の心に響き、賛同を得たかについて考察する。

ポライトネスの基本概念を理解するには、言語哲学者Paul Griceの会話の理論である協調の原理⁽²⁾を理解しておく必要がある。Griceは、会話を話者と話し手の共同作業であるとし、この原理の基で協調的であるとは、どのようなことかを4つの格律(maxims)の中で説明を試みた。しかしこの原理に則った場合でも、絶対的に適切なコミュニケーションが成立するというわけではない。一般に原理・原則は遵守すべきものであるが、実際の会話では故意にこの原理に違反する場合も多分にしてある。意図的な規則違反には、誇張表現、控えめな表現、比喩等がある。本題とは無関係な世間話やジョークが、相手との心理的な距離を縮める場合もある。協調の原理とは、コミュニケーションにおける規範的なモデルである一方、非強制的、かつ意図的な原則違反が必ずしも適切なコミュニケーションを阻害する決定的な要因であるとは言いえない。滝浦(2008)では、協調の原理と会話の格率は、「正確さ」に関する原理原則であり、「情報伝達の効率性」という点における規範モデルであると指摘している。

効果的なコミュニケーションを成立させるためには、協調の原理を遵守することは自明のことである。加えて、相手への配慮を欠かさず、対人関係を調節することもまたコミュニケーションの成立に関する要素であるとB&Lは考えた。

B&Lの理論では、フェイス(face)⁽³⁾が主要概念となっている。このフェイスとは、誰もが持つ自己像であり、フェイスを維持することで適切なコミュニケーションが成立する。フェイスを脅かす行為をFTA(face threatening act)と呼ぶ。B&Lによると、発語内行為には、相手のフェイスを侵害し得るFTAが少なからず行われていると指摘しており、一般に人はFTAをなるべく避け、その度合いもでき得る限り軽いものにしようとする傾向がある。FTAを避け、フェイスを維持するための言語ストラテジーが、ポライトネスであるといえる。

フェイスには、(1) ポジティブ・フェイス(positive face)と、(2) ネガティブ・フェイス(negative face)とがある。ポジティブ・フェイスとは「誰かに理解されたい」、「仲間として認められたい」、「他者との距離を縮めたい」という欲求である。他方、ネガティブ・フェイスとは「他者に立ち入ってほしくない」、「自分の行動を邪魔されたくない」、「他者と距離をおきたい」という欲求である。

B&Lの理論ではフェイス自体は、普遍的なものであるが、フェイスに配慮したストラテジーは各言語、文化により異なるとしている。また、FTAによるフェイスを脅かす大きさW(weight)は、(1) S(話し手)とH(聞き手)の社会的距離D(distance)、(2) S(話し手)とH(聞き手)の力関係(power)、(3) 特定の文化におけるある言語行動の負担度R(ranking of imposition)の3要素により決まるとされている。これを式にすると、フェイス侵害度 $W_x = D(S+H) + P(S,H) + R_x$ と表記できる。ここに示した式は、あくまでも概念表記であ

り実際に数値化するためのものではない。

また、B&Lの理論について注目すべき点のひとつは、「情報伝達の効率性」と、「対人配慮」とが相反する関係にあるということを指摘し、意図的な格率違反を推意 (implicature) と考え、それを理論化した点である。つまり、効率性を重視した場合、対人配慮の度合いは減少する。一方、対人配慮を重視した場合、効率性が減少する。

言語行為におけるFTAの回避は難しく、ポライトネスとはFTAに対する補償的言語配慮、FTAの度合いを軽減させるための言語行動であるともいえる。

B&Lは、ポライトネスが表現、伝達される手段をストラテジー（方略）と呼んだ。彼らのストラテジーを、フェイス・リスクの軽い順に挙げると、(1) フェイスを脅かす言語行動をおこさない (Don't do the FTA)、(2) 言外にほのめかす (Off-record)、(3) ネガティブ・フェイスに配慮した言い方をする (Negative politeness)、(4) ポジティブ・フェイスに配慮した言い方をする (Positive politeness)、(5) フェイス侵害を軽減する措置を取らずあからさまに言う (Bald on record) の5段階である。

実際には、(1) の「言語行動の回避」と、(5) の「フェイス侵害の軽減なし」を除いた (2) ~ (4) のうちで対人配慮をとりながら、意図伝達が適切に行われている。(B&Lでも、これらが中心的に議論されている。)

既述したように「誰かに理解されたい」、「仲間として認められたい」、「他者との距離を縮めたい」という欲求が、ポジティブ・フェイスである。このストラテジーは、相手との距離を縮め、相手のフェイスに積極的に関わろうとする「共感」、「連帯」と位置づけられる。相手を気遣い、共感できる点を探り、同じ方向性を向き、共同性を持つようとする。まさに、対人配慮のストラテジーであるといえる。B&Lはこのストラテジーについて、15種類の下位ストラテジーを提唱している。

表一1 (ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー)

- (1) Hearer (以下H) (の興味、欲求、ニーズ、持ち物) に気づき、注意を向けよ (notice, attend to H (his interests, wants, needs, goods))
- (2) (Hへの興味、賞意、共感を) 誇張せよ (Exaggerate (interest, approval, sympathy with H))、(3) Hへの関心を強調せよ (Intensify interest to H)
- (4) 仲間であることを示す指標を用いよ (Use in-group identity markers)
- (5) 一致を求めよ (Seek agreement)
- (6) 不一致を避けよ (Avoid disagreement)
- (7) 共通基盤を想定・喚起・主張せよ (Presuppose/raise/assert common ground)
- (8) 冗談を言え (Joke)
- (9) SはHの欲求を承知し気遣っていると主張せよ、もしくは、それを前提とせよ (Assert

or presuppose S's knowledge of and concern for H's wants)

- (10) 申し出よ、約束せよ (Offer, promise)
- (11) 楽観的であれ (Be optimistic)
- (12) SとH両者を行動に含めよ (Include both S and H in the activity)
- (13) 理由を述べよ (もしくは尋ねよ) (Give (or ask for) reasons)
- (14) 相互性を想定せよ、もしくは主張せよ (Assume or assert reciprocity)
- (15) Hに贈り物をせよ (品物、共感、理解、協力) (Give gifts to H (goods, sympathy, understanding, cooperation))

(田中典子 訳)

ポライトネス・ストラテジーであるが、言語ストラテジーとしては、何気ない会話の中においても、久しぶりに会った友人の外見上の変化 (例えば髪を切って以前のイメージとは全く異なっている等) を気にかけたり、聞いているという意志や、共感できるということを示すためにあいづちをうったり、話し手の気持ちに同調することもポライトネス・ストラテジーに相当する。確かに、親しい関係にある人との会話の中でポライトネス・ストラテジーは頻繁に見られる言語表現ではあるが、必ずしも親しい関係にある人の会話の中にのみ使用される言語ストラテジーというわけではない。つまり、明示的に連帯感や仲間意識を表現する類の言語表現が多用され、連帯感が構築、維持されるだけでなく、より連帯感が強化されるという機能をポライトネスは有する。

本稿では特に、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの観点から分析することとするが、ポライトネス理論を体系的に捉えるために、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーについてもストラテジーを提示する。また、ここに記したポライトネス・ストラテジーは、それぞれが独立的ではなく、補完的に連動して機能しているといえる。

ネガティブ・ポライトネスとは、「他者に立ち入ってほしくない」、「自分の行動を邪魔されたくない」、「他者と距離をおきたい」という欲求であり、以下の10種類の下位ストラテジーが認められる。

表—2 (ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー)

- (1) 慣習に基づき間接的であれ (Be conventionally indirect)
- (2) 質問せよ、ヘッジを用いよ (Question, hedge)
- (3) 悲観的であれ (Be pessimistic)
- (4) 負担 R_x を最小化せよ (Minimize the imposition, R_x)
- (5) 敬意を示せ (Give deference)
- (6) 謝罪せよ (Apologize)

- (7) SとHを非人称化せよ：人称代名詞「私」、「あなた」を避けよ（Impersonalize S and H : Avoid the pronouns “I” and “you”）
- (8) FTAを一般規則として述べよ（State the FTA as a general rule）
- (9) 名詞化せよ（Nominalize）
- (10) 自分が借りを負うこと、相手に借りを負わせないことを、オン・レコードで表せ（Go on record as incurring a debt, or as not indebting H）

（田中典子 訳）

3. スピーチ分析と考察

対象とするテキストは、オバマ大統領が2016年5月27日に広島市の平和記念公園で行ったスピーチである。現職の大統領としては、初めて被爆地である広島を訪問し、そのスピーチは被爆者をはじめ多くの人々の心に響き、共感を呼ぶものであった。分析にあたり、The Japan Times News Digestから原稿を入手し、内容の分析をした。その後、B&Lのポライトネス理論、特にポジティブ・ポライトネス理論を基にテキストを分析した。

スピーチ全体を通して、自身の考えを述べる場面において、高い頻度で“we”とその派生形である“our”、“us”が使用されている。この“we”はinclusive we（包含のwe）と呼ばれ、聞き手と読み手とが同じ方向を目指し、共感をもたせる機能を持つ。

（例1） Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not-so-distant past. We come to mourn the dead, including over 100,000 Japanese men, women and children, thousands of Koreans, a dozen Americans held prisoner. Their souls speak to us. They ask us to look inward, to take stock of who we are and what we might become.

（下線部筆者）

この場面では、広島を訪問した理由を核兵器の凄惨さに言及しつつ、戦争で犠牲になった方々に思いを巡らせるためと述べている。具体的にいうと、下線を付した箇所では、核兵器に関して犠牲者、さらには広島を訪れる人々と感じる事、核兵器のない世界を願う思いは、自分も同じであるという連帯感を与えている。B&Lのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに基づくと、核兵器のない世界を共に目指すという共通基盤を主張する機能を果たしている。(Positive Politeness Strategy1) (以下Positive Politeness StrategyはPPSと表記)

また、包含の“we”、“us”を用い、核兵器の凄惨さに対する共通の理解、廃絶に向けた連帯感の構築がされている。被爆地広島で被爆者、及びその遺族の視点に立った言語表現は、より強固な共感に結びつくと考えられる (PPS5)。この場面では、核兵器廃絶という意見の

一致に焦点を当て、PPS1同様に共通基盤を主張している。

緩和表現 (hedges) の使用もポライトネスに配慮した言語行動である。ここでの “a terrible force” は核兵器を指していると考えられるが、直接的に “a nuclear weapon” と表現するよりは、hedgesをかけた間接的な表現であるため、聞き手側も受ける印象が幾分緩和されると考えられる。hedgesをかけた表現の使用が、目の前にいる被爆者たちのネガティブ・フェイスに配慮した言語行動でもある⁽⁴⁾

(例2) In the span of a few years, some 60 million people would die—men, women, children, no different than us, shot, beaten, marched, bombed, jailed, starved, gassed to death.

(下線部筆者)

ここでは、「わずか数年の間に、およそ6000万人もの人が犠牲になり、その中には男性、女性、子どもたちといった私たちと何も変わらない人々が犠牲になった」と犠牲者の状況について言及している。犠牲者についても “us” を用いることで、私たちの仲間も凄惨な戦争で命を落としたということを印象付けている。つまり、仲間が犠牲になったという点では、「同じ気持ちを共有する仲間である」ということを、指標的に用いている。厳密に言えば、仲間内で用いる言語表現の使用がこのストラテジーにあたるのであるが、ここでの “us” の使用は、事実上これに準じた機能を果たしていると考えられる。(PPS4)

(例3) That is why we come to this place. We stand here in the middle of this city, and force ourselves to imagine the moment the bomb fell. We force ourselves to feel the dread of children confused by what they see. We listen to a silent cry. We remember all the innocents killed across the arc of that terrible war, and the wars that came before, and the wars that would follow.

(下線部筆者)

この直前では、科学の進歩について言及し、科学技術の進歩は必ずしもプラスに影響を及ぼすだけでなく、マイナスにも影響し得ると言う点を指摘している。つまり、技術の進歩に伴い、核兵器が開発されたが、同時に道徳革命の必然性についても言及している場面である。

被爆地である広島において、(1) 原爆が落ちた瞬間を思い浮かべ、(2) 目の前の光景に戸惑う子どもたちの恐怖を感じ、(3) 声なき悲鳴に耳を傾ける、これらのことについて包含の “we” を使用し、当事者であるかのように当時の様子を想起している場面である。

原爆の投下により、多くの罪なき人が犠牲となり、原爆が落ちる様子、落ちてから目の前

の恐怖に戸惑う子どもたちの様子、声なき悲鳴に耳を傾ける、という行為は（被爆者、及び犠牲者の遺族だけでなく）皆同じであるということを強調し、それを前提に話が展開されていく。この場面は、(PP9)に基づくポライトネスとして機能していると考えられる。

(例4) Mere words cannot give voice to such suffering, but we have a shared responsibility to look directly into the eye of history and ask what we must do differently to curb such suffering again. Some day the voice of the hibakusha will no longer be with us to bear witness. But the memory of the morning of August 6th, 1945, must never fade. That memory allows us to fight complacency. It fuels our moral imagination. It allows us to change.

(下線部筆者)

この場面では、被爆当時の凄惨で残虐的な様子を単に回想するだけでなく、やがて被爆者の生の声が聞こえなくなる前に、実際に行動に移すべきであると訴えている。あえて「被爆者」と日本語（一部の辞書には掲載済）を使用することで、仲間内であることを示している。B&Lのストラテジーによると、仲間内の呼びかけ語、方言、ジャーゴン、スラング等が、指示標識に該当するが、日本語の使用も結果的に(PP4)としての機能を果たしており、FTAの補償的言語行為であると考えられる。

(例5) And since that fateful day, we have made choices that give us hope. The United States and Japan forged not only an alliance, but a friendship that has won far more for our people than we could ever claim through war. The nations of Europe built a union that replaced battlefields with bonds of commerce and democracy. Oppressed peoples and nations won liberation. An international community established institutions and treaties that worked to avoid war and aspire to restrict and roll back, and ultimately eliminate the existence of nuclear weapons.

(下線部筆者)

ここでは、戦争の終結後、日米同盟を始め欧州の国家間でも連合が築かれ、国際社会の努力により、戦争を防ぎ、核兵器を制限し、減らし、最終的には廃絶するための礎を築いたということを言及している。ここでも包含の“we”を用い、日米の協力的な関係を想起させ、これもFTAの補償行為といえる(PPS12)。

様々な国際機関が設立され、戦争、核兵器の抑止を目指しているが、アメリカの現職大統領が自ら被爆地を訪ね、核兵器の悲惨さを述べることで、強い印象づけが成されたと考えら

れる。「最終的には核を廃絶すべきである」という欲求を持つ理由を、説得力を持って述べている (PPS13)。PPS12とPPS13の観点からこの場面は、共に協力して核兵器廃絶への道を築くという行動に取り込もうとしている。

(例6) We may not realize this goal in my lifetime. But persistent effort can roll back the possibility of catastrophe. We can chart a course that leads to the destruction of these stockpiles. We can stop the spread to new nations and secure deadly materials from fanatics.

ここでは、たとえ長期的にでも核兵器の備蓄をなくし、それが新たな国へと拡散することを防ぐことでもあり、狂信者の手に入ることを防げると述べている。被爆国が核兵器廃絶を望むのは言うまでもないが、間接的にはあるが、核保有国であるアメリカの現職大統領もがそれを望んでいるとも解釈できる。核なき世界を目指し、協力関係を共に築き、最終的には実現に向けて努めていこうという姿勢が感じられる。この場面からは、聴衆のポジティブ・フェイス欲求を満たす機能が働いていると考えられる。(PPS10)

(例7) And perhaps above all, we must reimagine our connection to one another as members of one human race. For this, too, is what makes our species unique. We're not bound by genetic code to repeat the mistake of the past. We can learn. We can choose. We can tell our children a different story, one that describes a common humanity; one that makes war less likely and cruelty less easily accepted.

(下線部筆者)

ここでは、人類の一員として世界中の誰もが繋がりを有しており、過ちを繰り返す遺伝子など、私たちには組み込まれていないと、核兵器廃絶へ向けた強い勢いが感じられる。また、We can ~という同形の反復により、韻律的な強意表現ととれる。(PPS2)

(例8) That is why we come to Hiroshima, so that we might think of people we love, the first smile from our children in the morning, the gentle touch from a spouse over the kitchen table, the comforting embrace of a parent—we can think of those things and know that those same precious moments took place here 71 years ago. Those who died, they are like us. Ordinary people understand this, I think. They do not want more war. They would rather that the wonders of science be focused on improving life. And not eliminating it.

(下線部筆者)

ここでは、何気ない日常生活について具体的に述べ、犠牲になった人々も我々と何も変わらない人間であるということをさらに強調している。また、聴衆に対して、普通の人ならば「戦争は望まない」と一致を求め (PPS5)、「科学の進歩による恩恵は、生活向上のために活かされるべきだ」と共通基盤を想定し、喚起・主張している。(PPS7) として機能していると考えられる。

(例9) The world was forever changed here. But today, the children of this city will go through their day in peace. What a precious thing that is. It is worth protecting, and then extending to every child. That is a future we can choose, a future in which Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.

(下線部筆者)

スピーチの最後にオバマ大統領は、今、広島の子どもたちは平和な日々を過ごしている。この平和を守り、世界中の子どもたちにも広げ、広島と長崎は、核戦争の夜明けとしてではなく、道徳的な目覚めの始まりであるべきだと述べている。「平和の維持」という共通基盤を想定し (PPS7)、「道徳的な目覚め」を通して核兵器の廃絶に向けた行動を聴衆に促して (PPS12) スピーチを結んでいる。

広島記念公園の芳名録

We have known the agony of war. Let us now find the courage, together, to spread peace, and pursue a world without nuclear weapons.

Let's ~も包含の“we”の一形態である。広島平和記念資料館の芳名録のサインにも、「平和を共にひろげよう」と記されており、(PPS15) として機能していると考えられる。

4. 結論

本稿では、2016年5月27日の広島平和記念公園におけるオバマ大統領のスピーチを、ポライトネス理論の枠組みで分析した。スピーチでは、直接的な「謝罪」はなかったものの、道徳的な目覚め、最終的な核兵器の廃絶を共に目指すことを促す内容であった。核保有国であるアメリカの現職大統領が、被爆地を訪れただけでなく、将来的に核兵器廃絶を促す内容のスピーチをしたこともまた歴史的な出来事といえる。核兵器の凄惨さに言及しつつ、多くの

犠牲者の声なき訴えに思いを巡らせたオバマ大統領は、平和の尊さを強くスピーチの内容に盛り込んでいる。

一方で、核兵器廃絶に向けた方略等については、具体的提示はなく、そのプロセスについても明示的ではない。将来的には核兵器廃絶を願うオバマ大統領であるが、その強い意志はスピーチの中で構想が具現化されていない。

男女のコミュニケーションスタイルに注視した研究を行ったDeborah Tannenは、男女のコミュニケーションの違いを次のように指摘している。

男性に特徴的なコミュニケーションスタイルは、情報中心であり一般に、何か情報を得たいということを念頭にコミュニケーションが行われる。一方で女性にとって会話とは、相手と同じような考えを話すことを通して快適な感じ、親密度を作ることが目的であることが多いとしている。

このような男女のコミュニケーションのスタイルの相違をTannenは、レポート・トークとラポール・トークと呼んだ。レポートとは報告であるから、情報中心の男性に特徴的なスタイルである。一方、ラポールとは、お互いに信頼し合っている、心が通い合っていると感じられる関係を示す言葉で、女性のコミュニケーションスタイルとは、ラポール関係の構築を目指しているといえる。

Tannenは男女のコミュニケーションのスタイルの相違を、レポート・トーク、ラポール・トークとして概念化したが、必ずしも簡単に割り切れるものではない。レポート・トークと、ラポール・トークは、性差そのものというより聞き手との関係性の違い、すなわち「上位下達」型と「水平志向」型、「一方向」型と「双方向」型の違いを象徴的に表していると指摘している（東2009 参照）。

人間の認知プロセスは、直感や感覚による部分も決して少なくない。情緒的に感情に訴えかけるスタイルが、結果的にイメージや経験等のスキーマと相互作用し、共感をより深める作用があると考えられる。

今回のスピーチでは被爆者とその遺族、さらにオバマ大統領が、同じ目線で原爆が投下された凄惨な様子を振り返り、被爆者をはじめ、世界中の人々が協力して核なき世界を目指すという強い意志が文言の中に込められている。日本人は仲間との共和を大切に、「和を以て貴しと為す」の精神が認められる。このような日本人の国民性と、オバマ大統領のラポール・トーク的なコミュニケーションスタイル、明示的に連帯感や仲間意識を表現する類の言語形式、ポライトネス・ストラテジーとが相互作用し、より連帯感を強固なものにし、強い共感をも生み出したといえる。

注

(1) ポライトネスという概念について、「丁寧さ」や、「礼儀正しさ」等の訳語があてられることが多い。例えば、あまり親しくない人に立ち入ったことを聞いてほしくない場合、あえて不躰で、配慮に欠いた表現を使用する場合がある。これも、一種のポライトネス（この場合は、インポライトネス）と考えることができる。一般にいう「丁寧さ」、「礼儀正しさ」よりも広義な概念を指すため、カタカナで「ポライトネス」と表記する。

(2) 会話を話し手と聞き手との共同作業であると主張する Grice は、協調の原理 (Cooperative Principle) と呼び、次の4つの格率を提唱した。(1) 量の格率 (発話の情報量を要求されているだけの量にすること、また要求されている以上の量にしないようにすること)。(2) 質の格率 (間違っていると思うことや、確たる証拠のないことを言わないようにすること)。(3) 関連の格率 (関係のあることを言うこと)。(4) 様態の格率 (明瞭な話し方をすること)

(3) フェイスには、「面子」、「体面」、「社会的自己像」といった訳語が充てられることもあるが、ポライトネス同様、フェイスとカタカナで表記する。このフェイスは一般に、普遍的であるということが前提されている。

オバマのスピーチが、ポライトネスに配慮したものであるとするならば、コミュニケーションにおけるポライトネスは、フェイスを保つための言語ストラテジーであるともいえる。

(4) 通常、hedges はネガティブ・ポライトネスの特徴のひとつであるが、ポジティブ・ポライトネスの機能を持つものもある。例えば、英語では sort of, kind of, like, in a way 等が挙げられる。

参照文献

東 照二 (2006)『歴代首相の言語力を診断する』東京：研究社。

東 照二 (2009)『オバマの言語感覚 人を動かす言葉』東京：日本放送協会出版社。

東 照二 (2010)『選挙演説の言語学』東京：ミネルヴァ書房。

Brown, Penelope, Levinson C. Stephen (1978) *Politeness Some universals in language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』)

田中典子 監訳 齋藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子 訳 東京：研究社。

Holt, Elizabeth, Clift, Rebecca (2007) *Reporting Talk*. Cambridge: Cambridge University Press.

伊藤達也・松倉信幸・市島清貴 (編) (2016)『言語コミュニケーションのこれから』東京：朝日出版社。

Mills, Sara (2003) *Gender and politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

中島信夫 (編) (2012)『語用論』(朝倉日英対照言語学シリーズ7) 東京:朝倉書店。

竹野谷みゆき (2012)「パブリック・スピーキングの公共性を探る：エコロジカル・アプローチでみるアメリカ民主党大会基調演説のスピーチ分析」『東洋大学文学部紀要英語コミュニケーション学科』第12号、119-134.東洋大学。

滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 東京:研究社.

Leech, Geoffrey (2014) *The Pragmatics of Politeness*. Oxford: Oxford University Press.

Watts, J. Richard (2003) *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

スピーチ全文

1. Seventy-one years ago, on a bright, cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself.

2. Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not-so-distant past. We come to mourn the dead, including over 1000,000 Japanese men, women and children, thousands of Koreans, a dozen Americans held prisoner. Their souls speak to us. They ask us to look inward, to take stock of who we are and what we might become.

3. It is not the fact of war that sets Hiroshima apart. Artifacts tell us that violent conflict appeared with the very first man. Our early ancestors, having learned to make blades from flint and spears from wood, used these tools not just for hunting, but against their own kind. On every continent, the history of civilization is filled with war, whether driven by scarcity of grain or hunger for gold; compelled by nationalist fervor or religious zeal. Empires have risen and fallen. Peoples have been subjugated and liberated. And at each juncture, innocents have suffered, a countless toll, their names forgotten by time.

4. The World War that reached its brutal end in Hiroshima and Nagasaki was fought among the wealthiest and most powerful of nations. Their civilizations had given the world great cities and magnificent art. Their thinkers had advanced ideas of justice and harmony and truth. And yet, the war grew out of the same base instinct for domination or conquest that had caused conflicts among the simplest tribes; an old pattern amplified by new capabilities and without new constraints. In the span of a few years, some 60 million people would die—men, women, children, no different than us, shot, beaten, marched, bombed, jailed, starved, gassed to death.

5. There are many sites around the world that chronicle this war, memorials that tell stories of courage and heroism, graves and empty camps that echo of unspeakable depravity. Yet in the image of a mushroom cloud that rose into these skies, we are most starkly reminded of

humanity's core contradiction; how the very spark that marks us as a species—our thoughts, our imagination, our language, our tool-making, our ability to set ourselves apart from nature and bend it to our will—those very things also give us the capacity for unmatched destruction.

6. How often does material advancement or social innovation blind us to this truth? How easily we learn to justify violence in the name of some higher cause? Every great religion promises a pathway to love and peace and righteousness, and yet no religion has been spared from believers who have claimed their faith as a license to kill. Nations arise, telling a story that binds people together in sacrifice and cooperation, allowing for remarkable feats, but those same stories have so often been used to oppress and dehumanize those who are different.

7. Science allows us to communicate across the seas and fly above the clouds; to cure disease and understand the cosmos. But those same discoveries can be turned into ever-more efficient killing machines.

8. The wars of the modern age teach us this truth. Hiroshima teaches this truth. Technological progress without an equivalent progress in human institutions can doom us. The scientific revolution that led to the splitting of an atom requires a moral revolution, as well.

9. That is why we come to this place. We stand here in the middle of this city, and force ourselves to imagine the moment the bomb fell. We force ourselves to feel the dread of children confused by what they see. We listen to a silent cry. We remember all the innocents killed across the arc of that terrible war, and the wars that came before, and the wars that would follow.

10. Mere words cannot give voice to such suffering, but we have a shared responsibility to look directly into the eye of history and ask what we must do differently to curb such suffering again. Some day the voice of the hibakusha will no longer be with us to bear witness. But the memory of the morning of August 6th, 1945, must never fade. That memory allows us to fight complacency. It fuels our moral imagination. It allows us to change.

11. And since that fateful day, we have made choices that give us hope. The United States and Japan forged not only an alliance, but a friendship that has won far more for our people than we could ever claim through war. The nations of Europe built a union that replaced battlefields

with bonds of commerce and democracy. Oppressed peoples and nations won liberation. An international community established institutions and treaties that worked to avoid war and aspire to restrict and roll back, and ultimately eliminate the existence of nuclear weapons.

12. Still, every act of aggression between nation, every act of terror and corruption and cruelty and oppression that we see around the world shows our work is never done. We may not be able to eliminate man's capacity to do evil, so nations and the alliances that we've formed must possess the means to defend ourselves. But among those nations like my own that hold nuclear stockpiles, we must have the courage to escape the logic of fear, and pursue a world without them.

13. We may not realize this goal in my lifetime. But persistent effort can roll back the possibility of catastrophe. We can chart a course that leads to the destruction of these stockpiles. We can stop the spread to new nations and secure deadly materials from fanatics.

14. And yet that is not enough, for we see around the world today how even the crudest rifles and barrel bombs can serve up violence on a terrible scale. We must change our mindset about war itself to prevent conflict through diplomacy, and strive to end conflicts after they've begun; to see our growing interdependence as a cause for peaceful cooperation and not violent competition; to define our nations not by our capacity to destroy but by what we build.

15. And perhaps above all, we must reimagine our connection to one another as members of one human race. For this, too, is what makes our species unique. We're not bound by genetic code to repeat the mistake of the past. We can learn. We can choose. We can tell our children a different story, one that describes a common humanity; one that makes war less likely and cruelty less easily accepted.

16. We see these stories in the hibakusya—the woman who forgave a pilot who flew the plane that dropped the atomic bomb because she recognized that what she really hated was war itself, the man who sought out families of Americans killed here because he believed the loss was equal to his own.

17. My own nation's story began with simple words: All men are created equal, and endowed by our Creator with certain unalienable rights, including life, liberty and the pursuit of

happiness. Realizing that ideal has never been easy, even within our own borders, even among our own citizens.

18. But staying true to that story is worth the effort. It is an ideal to be strived for, an ideal that extends across continents and across oceans. The irreducible worth of every person, the insistence that every life is precious; the radical and necessary notion that we are part of a single human family—that is the story that we all must tell.

19. That is why we come to Hiroshima, so that we might think of people we love, the first smile from our children in the morning, the gentle touch from a spouse over the kitchen table, the comforting embrace of a parent—we can think of those things and know that those same precious moments took place here 71 years ago. Those who died, they are like us. Ordinary people understand this, I think. They do not want more war. They would rather that the wonders of science be focused on improving life. And not eliminating it.

20. When the choices made by nations, when the choices made by leaders reflect this simple wisdom, then the lesson of Hiroshima is done.

21. The world was forever changed here. But today, the children of this city will go through their day in peace. What a precious thing that is. It is worth protecting, and then extending to every child. That is a future we can choose, a future in which Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.

広島記念公園の芳名録

We have known the agony of war. Let us now find the courage, together, to spread peace, and pursue a world without nuclear weapons.

An Analysis of Communication Style in Terms of Politeness Strategies

SHIBUSAWA, Yusuke

Summary

On May 26th 2016, U.S. President Barack Obama visited Hiroshima, where he made a very impressive speech. It was the first time that an incumbent president had visited Hiroshima.

Various studies analyzing speech have been done in view of discourse analysis and stylistics, including rhetoric. This paper explores why his speech echoes through the heads of many people, or attracts sympathy from many people, analyzing the speech in terms of politeness.

Brown and Levinson (1987) proposed principles of politeness, which influences this field today. The central concept of their theory is face, which means self-conception. We can establish communication with others by holding face. An action that affronts the face is called an FTA (face-threatening act). Brown and Levinson point out that we practice FTAs quite a bit in illocutionary acts, so we generally tend to avoid FTAs and alleviate them as much as possible. Politeness is a linguistic strategy to maintain our face. There are two types of politeness strategies: positive face strategy and negative face strategy. The former strategy consists of 15 subordinate ones, while the latter strategy consists of 10.

In this paper, I analyzed the president's speech within the framework of positive politeness strategy. Although the president did not apologize to the victims of the atomic bombing in World War II or their families in the speech, the message of the speech urges us to mark the first step toward a world without nuclear weapons. Not only did an incumbent president visit Hiroshima, but he also made a speech for the abolishment of nuclear weapons, making it a very historical event. Referring to the horror of nuclear weapons, the president greatly thinks of the unvoiced invocation, and is aware of the treasure of peace.

Deborah Tannen, an expert in the research of the different communication styles of men and women, pointed out that communication between them has dramatically different features. While men generally communicate with others with the idea of getting some useful information, women generally talk with people for the purpose of making a comfortable atmosphere by

talking about the same kinds of experiences or ideas.

Tannen called these communication differences between men and women report talk or rapport talk. While the president did not in fact refer to the total destruction of nuclear weapons, the style of his communication works as a rapport talk. Japanese people value personal relationships with others, so in this respect we were influenced greatly by the speech of President Obama.